

会社を個人のものではなく、 広く社会に求められる公器としていきたい

ヤマト

大和鋼業株式会社 代表取締役 大竹 順氏

昨年の訪中団に初めて参加され、大連・丹東方面を訪れた大竹さんは「中国は本当にすごい国です。あらゆる面で驚かされて、大きな刺激を受けました。ビジネスで中国に関係ない方々も一度は訪れて自分の目で見てほしい」と強く感じられたそうです。帰国後も当研究会で訪中委員のメンバーとして活躍されています。



昨年の訪中団報告会で話をする大竹さん

創業80年～時代とともに変化してきた～

1939年に創業。まさに時は第二次世界大戦の中、大竹さんの義理の祖父が立ち上げました。創業当時は、主に軍需工場向けに鉄材料を販売していたそうです。

最初の転機は、40年ほど前の1970年代後半です。

あるお客様より、圧力容器を製造してほしいと依頼を受けます。当時は高度経済成長期で化粧品や医薬品などの液体流動系物質の加工が増加し、プラント工場で生産時に使用する釜の需要が多くなったためでした。

しかし時代とともに、材料は鉄からステンレスへと代わっていきます。第二の転機は10年ほど前で、ステンレス製品のみ取り扱うという決断でした。ステンレス加工は鉄より難しく加工単価も高くなるため、当然利益率も高くなります。

また材料の廃材もスクラップとして再利用ができるので無駄が省けて原価率も良くなります。時代背景に応じた事業展開が功を奏して、順調に業績を伸ばしてきました。

ありがたい経験

大学を卒業後、ショッピングモールなどの商業施設にテナントを誘致する会社で営業を経験。その後2年間のサラリーマン生活ののち、母の病気がきっかけで大和鋼業へ入社することになります。入社後はすぐに、退職した営業部長の後任で営業を担当するのですが、商品のことを聞かれても図面を見せられても、全くわからなかったにもかかわらず素直にお客さんに聞いてもらう毎日。実践で勉強しながら知識を習得していきました。

初めて自分の目で見た中国

参加のきっかけは、インバウンドの影響で訪日中国人の増加に伴って、化粧品を製造するプラントメーカーからの注文が同じように増加するのを見て、中国っていったいどんな国だろう?と思うようになったことでした。実際に行って自分の目で見た中国は、「日本は中国にあらゆる面で負けている。危機感でしかなかった」

と思われたそうです。現地の企業や工場、大学などを訪問することで観光に行く中国とは全く違った一面を感じることができた「日中経済交流研究会の訪中団」のすごさを感じたそうです。

社員や自分の子どもが入りたいと思う会社になりたい

2017年2月に代表に就任して2年半が経過しました。就任当初は80年近く続く企業の三代目としての重責を強く感じました。「社員や自分の子どもたちが入りたいと思ってくれる会社を作りたい。どうすればもっといい会社になれるのか?」一生懸命考えて社員一人一人に細かい要望を聞いてまわり、とにかく現場の声に耳を傾けました。そして三か年計画を作成し、次々とその要望を実行して職場の環境作りに取り組んでいきました。在庫の破棄など「今できることを徹底してやる」と常に心掛けてきた結果、受注はかなり先まで埋まるようになり、工場の稼働率もよくなりました。

利益も上がってきたので、社員に可能な限り還元されています。「今後10年で売り上げ10億、社員を100名ほどにしていきたい。そして将来は夢を大きくもって、上場をすることで会社を個人のものではなく、広く社会に求められる公器としていきたい」とおっしゃっています。

落ち着いた表情で話される大竹さんの目は生き活きと輝いていました。今後もますますの飛躍を確信したインタビューでした。(まとめ 株式会社Pink Rose 廣瀬みゆき)



昨年の訪中団で訪問先にて